研究結果

本研究は先行研究の矛盾を乗り越えるための一助として、最近のジェンダー研究で強調されている「ジェンダー･アイデンティの社会構築」というアプローチを用いた。　最近のジェンダー研究（中村 2001）では、性差問題をさまざまな権力と結びついた言説（ディスコース）が構築するジェンダー･アイデンティティとして捉える必要性が強調された。

こうした視点をもとに、筆者は、琉球大学法文学部の鈴木規之教授（専門：社会学、研究地域：東南アジア･タイ）の指導のもと、沖縄本島で４ヶ月（2006 年 3 月 1 日～6 月 30 日）のフィールドワークを行った。

フィールドワークにおけるデータ収集の基本となった理論的枠組みとしてはイギリスの社会科学者マーガレット･アーチャー（Margaret Archer）の実在論的社会理論（Realist Social Theory）を用いた。同理論は、現代の社会学理論の中核をなす構造（structure）と行為体（agency）の関係について、アンソニー･ギデンズ（Anthony Giddens）の構造化理論のように両者の相互構成を主張するのではなく、一応分析の上では二元的なものとみなし、アイデンティティの構築も社会によって一義的に決定されるのではなく、行為体の実践によって構築されごことを強調した。

また、行為体が構築するアイデンティティも、それぞれを取り巻く構造によって決定されるのではなく、それぞれの究極的な関心事（ultimate concern）および文化的な影響（cultural influences）によって影響されるとされた。

こうした理論的モデルをもとに、今回のフィールドワークの初期段階において、現代の沖縄におけるジェンダー・アイデンティティの社会構築を分析するための切り口としては、宗教･儀礼、親族組織、政治といったマクロ的な分野ではなく、戦前、戦後、本土復帰といった歴史的契機との関わりが重要であることが明らかになった。

そのため、本研究の事例研究としてライフヒストリー調査に協力していただけるインフォーマントもこうした三つの歴史的契機をもとに選定し、(1)沖縄戦記録フィルムーフィート運動の会の事務局長で著名な反戦運動家である中村文子氏（1913 年生まれ）、(2)戦後の沖縄における米軍兵士による性犯罪などに対する反対運動を続けてきた人件運動家･高里すずよ氏（1940 年生まれ）、(3)復帰後の沖縄における本土への依存をポスト･コロニアル的な状況と鋭く批判してきた随筆家･知念ウシ氏（1966 年生まれ）の三人に決定した。

今回の調査の最終段階では、これら三人のインフォーマントのライフヒストリーを克明に記録･分析し、反戦平和主義、人権主義、ポスト･コロニアリズムといった三つの異なる視点が現代の沖縄における女性運動家のジェンダー･アイデンティティの構築にいかに影響を与えたかを実在論的社会理論の視点から考察した。

こうした考察の成果は、2007 年７月、Being Human in Okinawa: Okinawan Women’s Active Acquisition of identity through the Interplay between Structure of Constraints and Active Agency と題する修士論文としてインドネシア大学大学院社会学修士課程に提出し、100 点満点で 98 点の評価を受け、筆者に修士（M.Si）号が授与された。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表　(題名・発表者名・会議名・日時・場所等)：

1．”Being Human in Okinawa: Okinawa Women’s Active Acquisition of identity through the interplay between structure of Constraints and active Agency”[沖縄を生きる：構造と行為体の相互作用を通した沖縄女性のアイデンティティ構築]、thesis presentation at the Department of Sociology, Faculty of social and Political sciences, University of Indonesia, June 7, 2007.[インドネシア大学社会政治学部社会学科におけるプレゼンテーション、2007年６月７日]

2．”Three Lives, Three Ideals: Okinawan Women’s Active Acquisition of Identity”[３つの生、３つの理想：沖縄女性のアイデンティティ構築]、presentation to the “One Day Seminar of Japanese studies in Indonesia” organized by the Japan Foundation, Jakarta, February 4, 2008.[国際交流基金主催日本研究セミナーにおけるプレゼンテーション、2008年２月４日]

論文　(題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)：

1．”Being Human in Okinawa: Okinawa women’s Active Acquisition of Identity through the interplay between Sturucture of Constraints and Active agency”[沖縄を生きる：構造と行為体の相互作用を通した沖縄女性のアイデンティティ構築]、master thesis submitted to the department of Sociology, Faculty of Social and Political sciences, University of Indonesia, July 2007.[2007年７月、インドネシア大学社会政治学部社会学科に提出された修士論文]

2．”Okinawan Women’s Active Agency”: The Struggle Against United states Military bases”[行為主体としての沖縄女性：反米軍基地闘争を中心に]、NIKKEN, Journal of Japanese Studies, faculty of Humanities, University of Indonesia, Vol 8 No.1 August 2007-January 2008.[インドネシア大学文学部発行日本研究ジャーナル「日研」、Vol 8 No.1、2007年８月－2008年１月号]

3．”Between dependence and Self-Reliance: Okinawa’s Structural Constraints and Future Challenges”[依存と自立のはざまで：沖縄の構造的制約と今後の課題]、MANABU, Journal of Japanese studies, Centre for Japanese Studies, University of Indonesia, Vol.2,May 2008 [in print].[インドネシア大学日本研究センター紀要「まなぶ」、Vol.2, 2008年５月号]

書籍　(題名・著者名・出版社・発行時期等)：

1．”Being Human in Okinawa: Okinawa Women’s active Acquisition of Identity through the Struggle Against United states Military Bases”[沖縄を生きる：反米軍基地闘争を通した沖縄女性のアイデンティティ構築]、monograph [in print] published by the Graduate Program, department of sociology, Faculty of social and Political sciences, University of Indonesia [インドネシア大学社会政治学部社会学科より出版される予定のモノグラフ]、May 2008 [2008年５月]

2．”Being Human in Okinawa: Okinawa Women’s Active acquisition of Identity through the Struggle Against United States Military Bases”[沖縄を生きる：反米軍基地闘争を通じた沖縄女性のアイデンティティ構築]、In *In search of sustainable Civil society Network in Asia* [title tentative] [『アジアにおけるサステイナブルな市民社会ネットワークの構築を求めて』所収予定]、Bachtiar Alam, Noriyuki Suzuki, Surichai Wenggao eds.[バクティル･アラム、鈴木則之、スリチャイ･ウェンガオ編著] Bangkok: Chulalongkom University [チュラロンコン大学出版予定、2008]